



TITLE:

珍しい流星の報告

AUTHOR(S):

藤原, 信悦

CITATION:

藤原, 信悦. 珍しい流星の報告. 天界 1930, 11(115): 22-25

ISSUE DATE:

1930-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161586>

RIGHT:

珍しい流星の報告

拜啓御繁忙の御事とは存じますが、昨夜午後八時五十一分不思議なる流星を見まして、不思議を御教へして貰ひたいと思ひ、御伺ひをしたのであります。無遠慮の段を御許し下さいませ。私は幼い時分より天文観測が好きで農業の餘暇は毎夜同じ事を繰返し乍ら観測してゐます。幼稚な點を御笑納且御諒察の程を御願ひします。私の望遠鏡は私が十四歳の時より貯金して十九歳の時二十六圓で買った小さい單筒のもので、木星の衛星も判然と見えぬものであります。

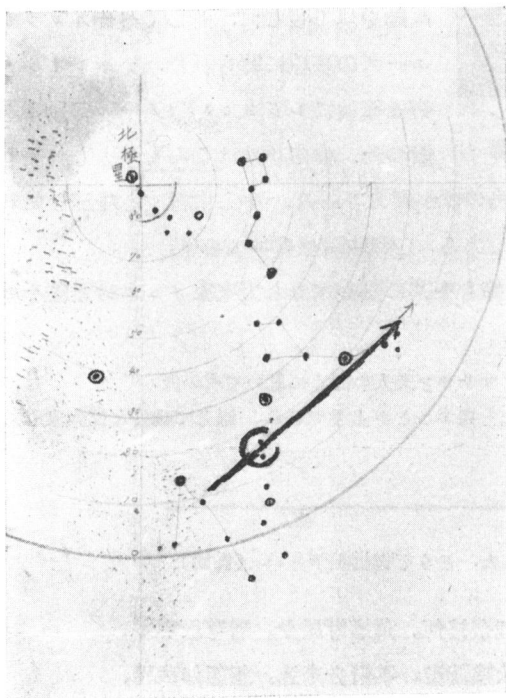
昭和五年七月廿六日夜

秋田縣山本郡鹿渡村字山谷

藤 原 信 悦

流 星 を 見 た 時

昭和5年7月26日午後8時51分。私は家の中で新聞を読んでゐた。自分の家の前には運動豫習の青年二十人ばかりゐて私の弟も其の中にゐる。大き



な光の星が飛んで尾が太いと云ふて私を呼ぶ弟の聲に走りて外へ出やうとした時が上記の時間。

私は三脚台や望遠鏡の持運びする時青年は喊聲を上げた。それは流星の尾に鍵が付いて刀のやうになつたと云ふ事である。其の時私は望遠鏡を持つて外へ出た時である。流星の後三四十秒過ぎた時である。

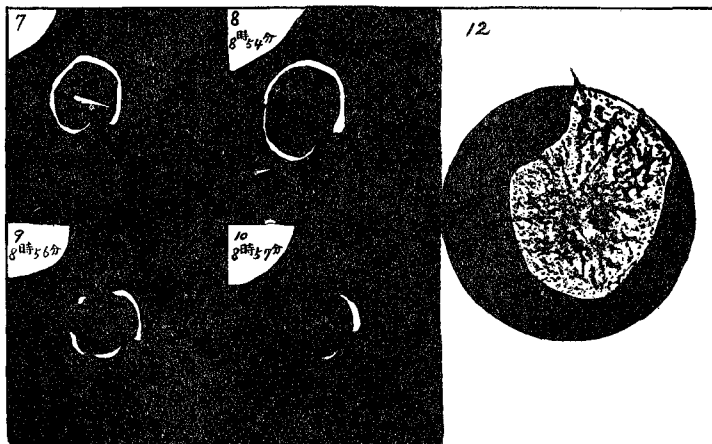
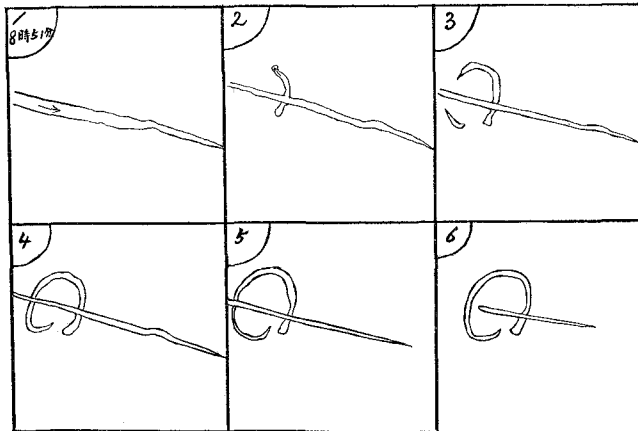
流星の尾が刀のツバになつた時

星が流れてから二三十

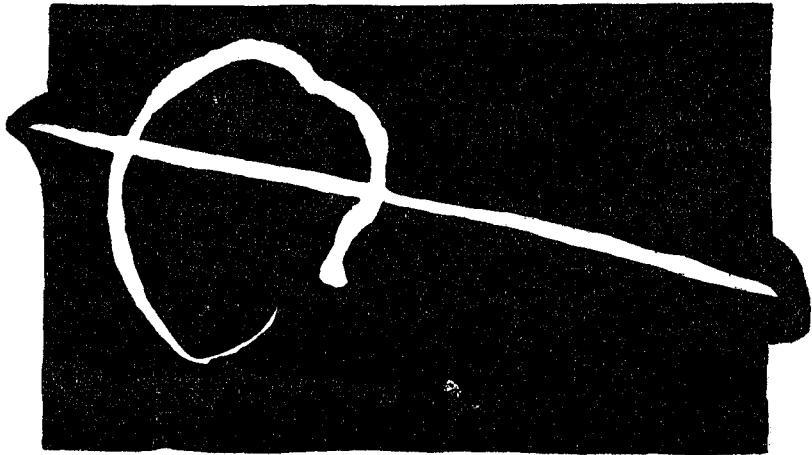
秒の後、花火の煙が空中に爆烈する時の煙のやうに第1圖の流星の尾に第2圖のやうにふんわりと現はれた。ソレは銀河より白さが少し強かつた。恰度刀のやうになつたのである。

第 三 圖

刀のやうになつたと皆が騒いでゐると、其の刀のツバは第3圖のやうに擴張して來て其の擴張の運動は雲の峯の形を變へるが如く伸びて來た。そして圖のやうに別の方にも一點現はれた。



第 十 一 圖



第 四 圖

流星の尾の一線は幾分細くなつて來たやうであるが、尖端の方に少し曲りがあるのは、まだ見える。そして刀のツバはだんだん伸びて、丸くなつた。そして西々南の方は離れてゐた。(第十一圖参照)

第 五 圖

尾の一線は細くなつて來た事が分る。然し環狀のものは少しも形を變じない。

第 六 圖

尾の一線は細く短くなつた。然し、環狀は少しも伸びず又消えず依然たり。

第 七 圖

環狀はまだ變らぬ。流星の尾は環狀の中に一文字しか見えない。此の時、時計を見しに、8時54分に10秒ばかり前である。

第 八 圖

8時54分には依然として環狀は残つてゐる。そしてさつぱり形を變ぜぬ事、暫らくなり。

第 九 圖

8時55分半、前よりは淡くなつて來たやうな感があり。また、く間に處々

に切れ間が出来た。

第 十 圖

環状はだんだんなくなり、第2圖の時刀のツバになつた處と末尾とのみ淡く見え、だんだん薄くなつて目で見えないやうで見えるやうで見えると云ふ人見えないと云ふ人の語り合ふ時は8時57分であつた。

望遠鏡で見た圖(第12圖)

私は流星の尾が全くなつてから望遠鏡で見た。忙て心であつたが随かに12圖のやうに私の目に見えた。環状の何處が映つたのか私は分らぬが、筆に墨を付けてフーと吹き飛ばしたやうな噴霧器で水を土間に撒いたやうになつて黒く長く、曲玉のやうなのが無數見えた。

太 陽 観 測 者 に 告 ぐ

去る1926年以來、會員諸氏が遂行された太陽黒點の觀測結果を、目下、花山天文臺の山本夫人の手で整理計算中であります。未報告の方は至急に結果を御送り下さい。計算は「天界」第63號の方法により、なるべく今年内に終了、來年早々本誌上に發表される筈であります。

倉敷天文臺創立四週年

來る十一月三十日(日曜)午後、本會の計營する倉敷天文臺では、創立滿四年を記念するため、下記の催しをなし、一般に公開す。會員諸氏及び有志家の御來集を歓迎す。

天文圖書展覽會 (主として邦文天文學書を陳列す)

學 術 講 演 會

山本一清氏 「現今の曆法改正問題」

百濟教猷氏 「未定」

天 體 觀 望 (主として月を觀望す)

以 上